

知的障害福祉研究

Support

さぽーと



埼玉県・社会福祉法人久美愛園 久美学園

撮影：高岩二郎

【特集】

子どもの育ちを考える

— 子どもたちの真の居場所を求めて —

● 訪問記〈山梨県〉

社会福祉法人
八ヶ岳名水会

● SEMINAR

(人材育成と定着)

日本型ノーレイティング
の方向性

7

ぽ れ ぽ れ

地域に根付き、地域と共に生きる

～地域の課題解決のための取り組み～

大分県・社会福祉法人みのり村 業務管理室長
大木昌太郎

はじめに

社会福祉法人みのり村（以下、みのり村）は大分県日出町と杵築市において障害児者施設や高齢者施設など13施設・30事業を運営している法人です。曹洞宗開祖である高僧、道元禅師の「礼拝は正法眼蔵也」（人が人を大事にすることが最も大切である）の教えを具現化するため、常に“ご利用者第一”の支援を心掛けながら、ご利用者の方が慣れ親しんだ場で、その人らしく安心して生活を送れるためのサポートを行っています。

みのり村について

終戦直後、創設者大木英正夫妻が「尊い人の世を自分の事の中に生きる程自分を粗末にしてはならぬ」という「みのり

の精神（こころ）」のもと、精神薄弱（当時の表現）の子らへ教育をと志を立て、1951（昭和26）年、日出町にて民間では当時西日本唯一初の精神薄弱児施設を開設して発足しました。以後、事業を展開して67年間、現在日出町にて障害児者施設6カ所、杵築市にて障害者施設5カ所、高齢者施設2カ所、合わせて30以上の事業、その他5つの公益事業を運営し、500名以上の方々にご利用されています。また、創設者の志は1954（昭和29）年、施設内に地元小中学校の分校併設、その後県立学校化実現のための陳情や用地提供も行い、1961（昭和36）年、現大分県立日出支援学校としても実現されてきております。

今日までみのり村が発展してこれたのも、多くの地域の方々の福祉に対する理解や協力なしには考えられませんでした。そのご恩に報いようと、過去には施設で調理した食事を入所ご利用者が独居高齢者に届けたことや施設の浴場を開放したこと、地元の駅や学校・公民館を彩る花の管理をご利用者が行っていたこともありました。

近年、地域が抱える課題が多様化・複

雑化している中で、地域のためにみのり村ができることは何か模索してきた現在進行形の取り組みをいくつかご紹介させていただきます。

こだわりの生産品～パン・花・有機堆肥・野菜等～を地域の皆様に

温泉で有名な別府市。別府湾を見渡せる眺望の良い住宅団地は、高齢化も進み、近くにスーパー等もなく、車がなければ買い物に不便を来すような小高い場所にあります。2001（平成13）年、みのり村とお付き合いのあった当時の自治会長から「買い物支援として移動販売ができないか」と相談を受けました。みのり村でも障害のある方々が作っている生産品を知っていただきたい、またご利用者が地域住民との交流を図れる機会を多く持ちたいと考えており、両者の思いが合致して移動販売が始まることとなりました。

当初は認知度が低く、準備していた生産品が多く残ることもありました。しかし、雨の日や風の強い日でも休むことなく開催し、お客様から花の植え方がわからないと聞けばご自宅に伺って植え方をお伝えするなど、地道な取り組みを続けていきました。結果、特にパン・野菜はすぐに売れ、家庭に飾れる花や野菜苗、そしてそれを育てるための有機堆肥もよく売れるようになりました。毎月10日に開催していたことから数年後には「十日市」と呼ばれ始め、自治会も販売日の前に回覧板で開催を知らせてくれたおかげで次第に周知されていきました。今では移動販売車が到着する前から住民の方が集まっており、待っている間も世間話や今日買う物についての話題など、笑顔と笑い声が聞こえてきます。販売に携わるとご利用者の中には、住民の方に顔と名前を覚えていただいている方もいます。「大切に育てた品物をお客さんが買ってくれるのがうれしい」と話し、住民の方からの「ま



移動販売「十日市」の様子

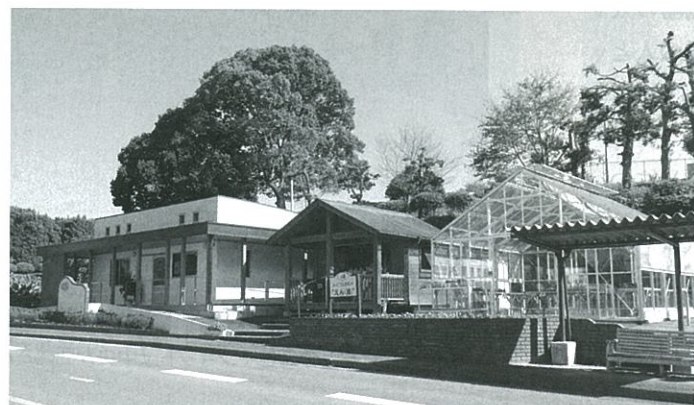
た来月もよろしく」という言葉を受け、それがご利用者の働く励みになっています。過去には販売する業者も数社おりましたが、収支の面で販売を諦めていきました。みのり村は今後も毎月待っていただいているお客様がいる限り法人理念に基づきこの活動を続けていきたいと思っております。

高齢者福祉への展開～介護・福祉タクシー、配食サービスの実施～

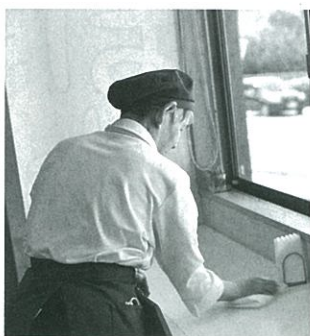
みのり村では障がいをもった入所ご利用者の高齢化を見越した検討を1965（昭和40）年と早くから行ってきました。この解決策として、1974（昭和49）年に特別養護老人ホーム菩提樹を開設し、みのり村における高齢者福祉事業が始まりました。

2000（平成12）年の介護保険制度開始以降も地域のニーズに応えるため通所介護事業や訪問介護事業などを開始していく中、地元介護タクシー事業者の廃業の話が伝わってきました。みのり村では病院や買い物の際の住民の足が無くなることを危惧し、理事長自ら一般乗用旅客自動車運送事業免許を取得するなど、タクシー事業の許可を得るための準備をし、2013（平成25）年より介護・福祉タクシー事業を実施しました。お客様からは「重たい買い物袋等を運んでくれる」「介護資格を持った運転手なので安心」「年金生活のため料金面で助かる」といった声をいただき、民間タクシー会社ではやらない部分まで対応させていただいています。

また同年、高齢者への配食サービスを実施していた社会福祉法人がそのサービ



国道沿いに立地してあるえむほガーデン



開店準備の光景 (m・歩っ)

スを突然断念。行政も困惑しているとのことより、困る人たちが出ないように早くから動き始め、スムーズに配食サービス事業を引き継ぐことができました。高齢者は免疫力が低下しやすく、長期入院・入所に繋がりがやすいため、朝・昼・夕と栄養バランスや味付けに配慮した食事を配達し、その際、声掛けも行うことで見守り安否確認にも繋がっています。障がいをもった高齢の方にも複数ご利用していただいております、1ヵ月の提供食数が1,400食近くに及ぶ月もありますが、「温かい食事が一番おいしい」と食事が届くのを心待ちにされている高齢者のためにも不可欠な事業だと感じています。

販売所「縁」がスタート

国道213号線沿いに立地しているみのり村では、昭和40年代より国道沿いに真っ赤なカンナや葉牡丹の花を広くに植え、入所ご利用者と共に管理を行ってまいりました。みのり村を訪れる方からは「みのり村という名前は知らなかったけれど、国道沿いに綺麗な花がたくさん植えられている所ですね」という言葉をいただくことも多くあり、これも地域の方や国道を通る方々への美化運動と考え誇りを持って取り組んできました。

2001(平成13)年、その花畑の一角にみのり村の生産品を販売する販売所「縁」を建築しました。「縁」は地域の方に気軽に立ち寄っていただき、法人やご利用者の活動を知っていただく場であり、ご利用者の就労にも繋がりたいという思いの下、3坪ほどの建物を建てて始めました。みのり村で生産した野菜や果物、花卉、味噌やパンなどの販売を通して、地域の方へも少しずつ認識されてきました。販売を担当するご利用者にとっても、お客様から名前を覚えていただける、「また買いに来るね」という言葉をいただけることで自信にも繋がっていき、働くことの喜びを



ご利用者の作品が飾られている店内 (m・歩っ)

純粹に感じている姿はとても印象的です。

「m・歩っ」ガーデンの整備

販売所「縁」を始めて以降障がい福祉を取り巻く環境も大きく変化してきました。その中で、みのり村においては六次産業化(生産×加工×流通×販売)の推進や特別支援学校卒業後の就労場所確保という点がこの地域の課題と考えていました。これらの課題に対応するため、2014(平成26)年国道沿い花畑を再整備し、販売所「縁」の隣にカレーやデザートなどを販売・提供するcafé「m・歩っ(えむほ)」を建設し、駐車スペースや花を販売するためのガラスハウスも整備し直し、これらを総称して「えむほガーデン」と名付け、装い新たにオープンしました。

「ホッ」とする場所であり、そして一歩ずつ歩んでいくみのり村のみ(m)を意味するcafé「m・歩っ」は、カレーと焼きカレーをメインとした提供、焼き立てパンやデザート・コーヒーを買ってそのまま食せるイートインスペースも備えており、調理経験が豊富な高齢スタッフと障がいのあるご利用者が共に働く場となっております。その成果として、みのり村へ独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構から優秀賞もいただきました。高齢スタッフからは「障がいがあってもできることがたくさんあり、働く意欲もあってすごい」という気付きが、ご利用者からは「いろいろなことをやさしく教えてくれるので安心して働ける」という言葉が聞かれ、雰囲気良く働ける環境になっています。

また、「職場でお客様と接している真剣な表情を見れてうれしい」という保護者の声も聞かれており、働くことがご利用者や周囲のびびりにとって重要なことなのだとはあらためて気付かされます。

菩提樹まちかど交流サロン

「福ろう」オープン

杵築市では人口が3万人を割ろうとす

る一方で、高齢化率が約35%と他の自治体同様高齢者対策が喫緊の課題となっています。高齢者の孤立予防や自立支援を促進し、健康寿命の延伸を図れるような拠点作りを検討していた行政。地域共生社会を推進するため障がい・高齢・児童・生活困窮者等が集い世代間交流も図れるような居場所作りを模索していたみのり村。日頃から両者で課題認識を共有していましたが、協議を重ねた末、2015(平成27)年4月、子どもから障がい者、高齢者まで“誰もが、いつでも、気軽に”立ち寄れる場所、菩提樹まちかど交流サロン「福ろう」としてオープンいたしました。街中にある空き家を改装し、談話スペースや調理場などを新たに備えた「福ろう」は、市が進める地域包括ケアシステム構築事業の一環としてみのり村が運営する特別養護老人ホーム菩提樹に委託され運営することとなりました。加えて市内で活動するボランティア団体にも参画していただき重要なポジションを担っていただいております。

「我が事・丸ごと」として「福ろう」を運営していく中で、認知症をお持ちの方のご利用や認知症に関する相談が多く出てきました。できるだけ長く住み慣れた場所で生活が続けられるために我々にできることは何かを考え、2016(平成28)年より認知症カフェ「ふくろう茶屋」を毎月1回開催するようになりました。そこでは、認知症の方と家族が集うだけでなく、みのり村の就労事業を利用するご利用者が運営の補助や販売・接客に入り、交流もしています。「私たちが明るく接して、皆で元気になればいい」と話してくるご利用者は、今では認知症カフェになくはない存在となっています。障がいのあるご利用者、高齢者、認知症の方、地域の方々、まさに“誰もが、いつでも、気軽に”集う場所になっています。近々、



「福ろう」入口に掲示してある多彩なメニュー

この場所で「こども食堂」もできればと考えています。

今後に向けて

ご紹介させていただいたこれらの事業ですが、採算ベースで見ると運営的には合わない事業もございます。しかし、目の前に困った人や地域が抱えている課題があれば手を差し伸べることこそが社会福祉法人の使命でもあり、社会福祉法人の存在意義はそこにあるのではないかと感じています。そして、もう一度創設者の思いや創設時の理念に思いを馳せ、社会福祉法人の原点に立ち返りたいと思います。

今後、減ることはないであろう地域の諸課題に対して、みのり村はこれからも「地域に根付き、地域と共に生きる」をモットーに実践を続けていきたいと考えます。

67年間築き上げてきた先人の努力と地域住民との信頼関係に感謝すると共に、地域の福祉課題に率先して対応するみのりの精神(慈愛・奉仕・研究)でもって、目前に控えた創設70年、そしてさらに100年へと変わることなくチャレンジし続けていきたいと考えます。

【お問い合わせ】

社会福祉法人みのり村
〒873-0013 大分県杵築市大字日野1921-7
TEL0978-66-1200 FAX0978-62-2974
<http://www.minorimura.or.jp/>